

令和 8 年度 第 1 回利根町文化財保護審議会

●日時:令和 8 年 5 月18日(月)

午前10時から

●場所:利根町役場 4-A会議室

会 議 次 第

- 1 開会
- 2 委嘱状交付
- 3 教育長あいさつ
- 4 協議事項
 - ①役員の選出について
 - ②杉野東山の書の町文化財の指定について
 - ③その他
- 5 閉会

○利根町文化財保護審議会条例

昭和51年3月26日

条例第8号

改正 昭和60年3月15日条例第10号

(設置)

第1条 地方自治法（昭和22年法律第67号）第138条の4第3項の規定に基づき、利根町教育委員会（以下「教育委員会」という。）に利根町文化財保護審議会（以下「審議会」という。）を置く。

(所掌事務)

第2条 審議会は、教育委員会の諮問に応じて、文化財の保存及び活用に関する重要事項について調査審議し、これらの事項に関して教育委員会に建議する。

(組織)

第3条 審議会は、学識経験のある者のうちから教育委員会が委嘱する委員（以下「委員」という。）7人以内をもって組織する。

(委員の任期)

第4条 委員の任期は、2年とする。ただし、補欠により就任した委員の任期は、前任者の残任期間とする。

2 前項の規定にかかわらず、特定の地位又は職により委嘱された委員の任期は、当該地位又は職にある期間とする。

(委員長及び副委員長)

第5条 審議会に委員長及び副委員長を置く。

2 委員長及び副委員長は、委員の互選とする。

3 委員長は、会務を総理し、審議会を代表する。

4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき又は欠けたときは、その職務を代行する。

(会議)

第6条 審議会の会議（以下「会議」という。）は、委員長が招集する。

- 2 委員長は、会議の議長となる。
- 3 会議は、定数の半数以上の委員が出席しなければ開くことができない。
- 4 会議の議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは委員長の決するところによる。

(専門委員)

第7条 専門の事項を調査審議するため必要があるときは、審議会に常時又は臨時に専門委員を置くことができる。

(幹事)

第8条 審議会に幹事若干人を置く。

- 2 幹事は、教育委員会の職員のうちから教育委員会が任命する。
- 3 幹事は、委員長の命を受け、会務を処理する。

(委任)

第9条 この条例に定めるもののほか、審議会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

- 1 この条例は、公布の日から施行する。
- 2 利根町文化財調査委員条例（以下「調査委員条例」という。）は、廃止する。
- 3 この条例施行の際、調査委員条例に基づき任命され、又は委嘱された委員は、この条例による委員として引き続き在任するものとし、その任期は、調査委員条例の規定に基づく就任の日から起算する。

附 則（昭和60年条例第10号）

この条例は、公布の日から施行する。

令和8・9年度文化財保護審議会 委員名簿

職 名	氏 名
委員長	古 田
副委員長	久保田
委 員	二 木
委 員	長 瀬
委 員	奈 良
委 員	高 橋
生涯学習課 課長	渡 辺 泰 幸
社会教育係 係長	地 脇 将 悟
社会教育係 主任	本 谷 梨 香
社会教育係 主任	小 丸 航多郎

様式第1号(第2条関係)



教育長	課長	補佐	係長	係

令和8年4月9日

利根町教育委員会 殿

申請者 住所 利根町大字布川841番地1
氏名 利根町教育委員会
教育長 海老澤 勤

利根町指定有形文化財指定申請書(有形民俗文化財)

別紙のものは、有形文化財として価値あるものと思われまますから、利根町指定文化財として指定して下さるよう関係書類を添えて申請します。

(別紙)

1 名称及び員数

杉野東山の書

2 所在地

利根町大字中谷967番地

3 所在者氏名又は名称及び住所

申請書のとおり

4 管理者又は管理団体の氏名又は名称及び住所

申請書のとおり

~~5 建造物であるときは、その構造及び形式~~

6 絵画、彫刻、工芸品その他建造物以外のものであるときは、その寸法、重量又は材質
その他の特徴

7 製作年代

8 作者名

9 由来又は沿革

6から12までは別添『杉野東山の書』のとおり

10 保存管理

利根町立歴史民俗資料館にて保存

~~11 その他参考資料~~

12 添付書類

(1) 写真並びに拓本

別添『杉野東山の書』のとおり

~~(2) 建造物であるときは、実測図及び付近の見取図~~

次の文書は、杉野東山の掛け軸を利根町教育委員会に寄贈した方の関係者から受領した文書となります。

- 1：京都和とじ館文書解読室様が作成した「杉野東山（一七六九～一八五一）の書」
- 2：1の解読文書における京都和とじ館様との質疑応答集
- 3：杉野東山の掛け軸が利根町教育委員会に寄贈されるまでの経緯

杉野東山（一七六九〜一八五二）の書

解説

京都和とし館文書解説室

解説責任 輿石 豊伸

令和八年（二〇二六）三月一五日

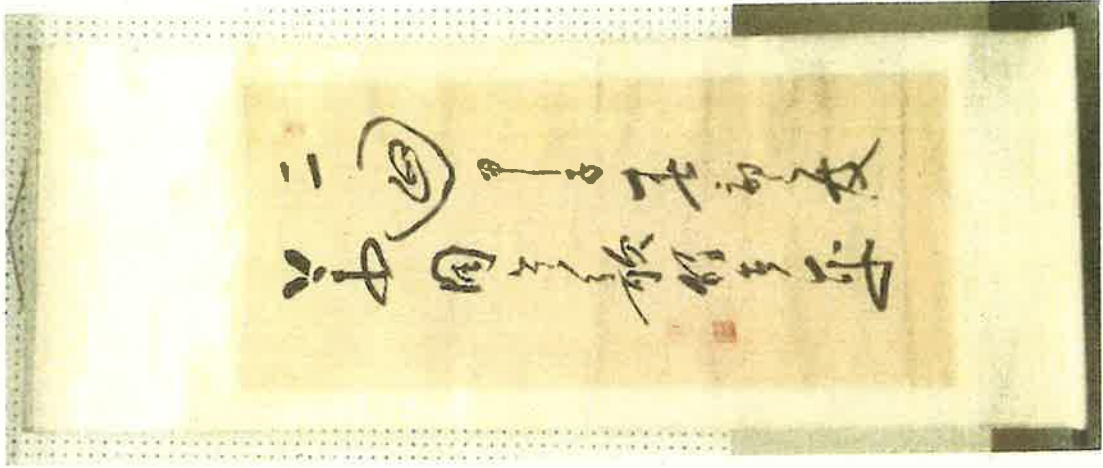


天地玄黃宇宙洪荒日月盈昃辰宿列張寒來暑往秋收冬藏閏餘成歲律呂調陽雲騰致
雨露結為霜金生麗水玉出崑岡劍號巨闕珠稱夜光菓珍李柰菜重芥薑海鹹河淡鱗潛羽翔
龍師火帝鳥官人皇始制文字乃服衣裳推位讓國有虞陶唐弔民伐罪周發殷湯坐朝
問道垂拱平章愛育黎首臣伏戎羌遐邇壹體率賓歸王鳴鳳在樹白駒食場化被草木賴
及萬方蓋此身髮四大五常恭惟鞠養豈敢毀傷女慕貞絜男效才良知過必改得能莫忘
罔談彼短靡恃己長信使可覆器欲難量墨悲絲染詩讚羔羊景行維賢克念作聖
德建名立形端表正空谷傳聲虛堂習聽禍因惡積福緣善慶尺璧非寶寸陰是競
資父事君曰嚴與敬孝當竭力忠則盡命臨深履薄夙興溫清似蘭斯馨如松之盛川
流不息淵澄取映容止若思言辭安定篤初誠美慎終宜令榮業所基籍甚
無竟學優登仕攝職從政存以甘棠去而益詠樂殊貴賤禮別尊卑上和和睦
夫唱婦隨外受傳訓入奉母儀諸姑伯叔猶子比兒孔懷兄弟同氣連枝交友
投分切磨箴規仁慈隱惻造次弗離節義廉退顛沛匪虧性靜情逸心動神疲
守真志滿逐物意移堅持雅操

丙戌元旦試筆 (印)

これは千字ある「千字文」の前半を筆写したものです。「千字文」は中国の周興嗣(しゅうこうし)が異なる千の
字で編纂した漢字の手本書で、成立は六世紀前半とされています。日本にも早くから伝わり、書道の手本として、
行書、楷書、隸書、草書など多くの書体で書かれ流布します。「丙戌元旦試筆」とありますので、文政九年(一
八二六)年の正月元旦に試しに草書体で書いたものです。

掛け軸 (二)



二回甲子春初度
万国笙歌醉太平

(解)

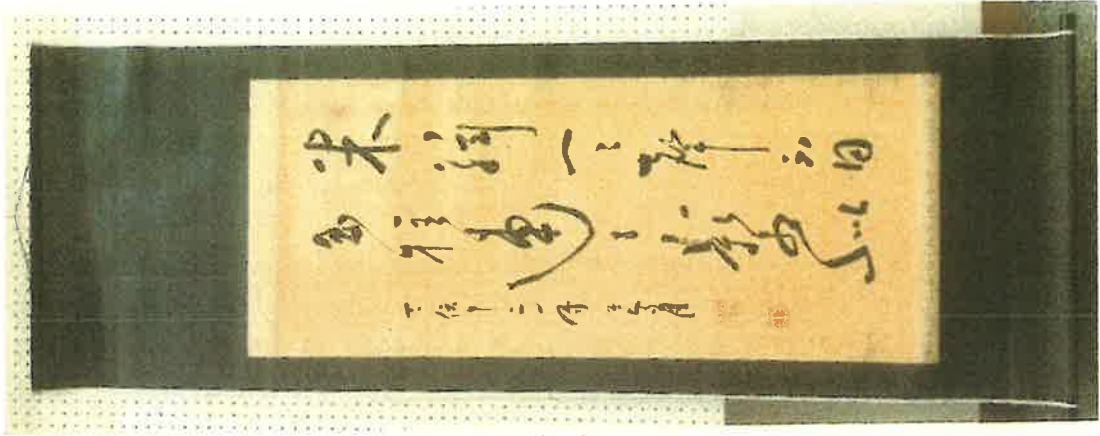
二回甲子春初度 二回^{にかい}の甲子^{がっし} 春初^{はるはじ}めて度^{わた}る
万国笙歌醉太平 万国^{ばんこく}笙歌^{しやうか}し 太平^{たいへい}に酔^よう

二廻りの干支を迎え（還暦を迎えたことをいう）、新しい気持ちで進んでいこう。国々も笛を吹き歌って太平を謳歌してくれているのではないか。

(補足)

「甲子」は干支の「きのえね」を表すとともに、干支（歳）の意でも用いられ、二回の甲子を迎えたというのは、六十歳になり還暦を迎えたことを表します。まさに還暦を祝う思いを記したもので、二句目の「万国笙歌醉太平」は、中国唐代の詩人杜牧（とぼく）の「過華清宮絶句三首その三」に「万国笙歌醉太平 倚天樓殿月分明」とある句からの引用です。ちなみに東山は明和六年（一七六九）の生まれですので甲子（干支）は「己丑（つちのとうし）」で二回りの「己丑」は文政十二年（一八二九）となり、この年の作と思われます。

掛け軸 (三)



朱弦一一聲不同

玉柱連々影相似

天保十三年 閏望月

(解)

朱弦一一聲不同

朱弦一一聲同じからず

玉柱連々影相似

玉柱連々影相似たり

天保十三年 (一八四二) 閏望月 (閏九月十五日)

弾かれる赤い弦からは一つ一つ異なる音が奏でられ、玉柱は連々として、影はみな同じ。

(補足)

これは中国唐代の詩人王誼 (おうしん) の「夜坐看搗箏 (夜座して箏を搗くを看る)」と題する詩の一部です。詩は夜灯の元で琴を聴く内容です。天保十三年は閏年で、九月の次に閏九月がありました。この閏九月の満月の夜、月を愛でながらこの漢詩を思い出し揮毫したものと思われます。

(参考)

「夜坐看搗箏」詩は以下の通りです。

調箏夜坐灯光里 箏を調べ夜坐す 灯光の里

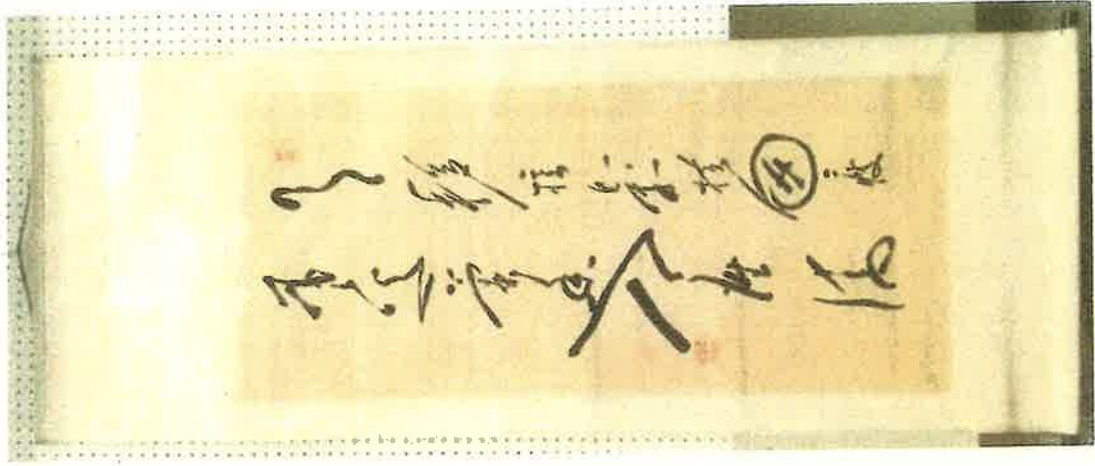
却挂羅帷露纖指 却りて羅帷を掛けて 纖指露はる

朱弦一一聲不同 朱弦一一 声同じからず
 玉柱連々影相似 玉柱連々 影相似たり
 不知何处学新声 知らず何れの処より 新声を学ぶか
 曲曲弹来未睹名 曲曲弾き来るも 未だ名を睹ず
 应是石家金谷里 應に是れ石家金谷の里なるべし
 流传未满洛阳城。 流れ伝はるも 未だ洛陽の城を満たさず

夜坐つて琴を奏でている、うつすらと点る灯りの元で。かすかな灯りの中、薄い絹のカーテン（羅帷）を透して、ほつそりとした指（纖指）が現れる。薄明かりの中、赤く浮き出た弦から打ち出される音は一つ一つみな、連つており、玉柱（琴の弦を支える柱）はいつまでも変わることなく影となつて映し出される。どこからこの新曲を学んできたものか、次々に曲が演じられていくが、どれもまだ初めて接するものばかり、曲名も分からない。こんな新曲が生まれる里は、まさに石家金谷の里（音楽が盛んな里の意か）であるに違いないが、まだ洛陽の都には伝わっていないのだ。

（解説者訳）

掛け軸 (四)



月移棕影扶匆渡
風吹菊香入座清

(解)

月移棕影扶匆渡 月は棕影に移り 匆を扶けて渡る
風吹菊香入座清 風は菊香を吹き 坐に入りて清し

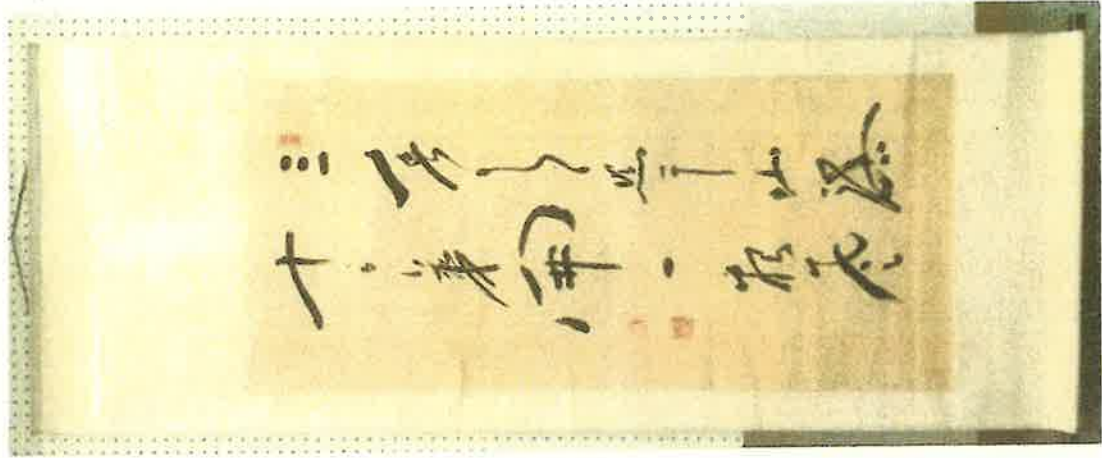
月は棕の影に移り、窓辺に添って過ぎていく。

風は菊の香りを吹いて、人々のいる坐へと清い香りを満たす。

- ・ 匆 (そう) 窓の意で用いる。
- ・ 扶匆 (ふそう) 窓辺に添って移動する様をいう。

※漢詩からの引用と思われるが、出典は不明。

掛け軸 (五)



三春月照千山路

十日華開一夜風

(解)

三春月照千山路 さんしゅんつきて 三春月照らす せんざん 千山路 みち
 十日華開一夜風 とおかはなひら 十日華開くも いちや 一夜の風 かぜ

春の三ヶ月の間、月は多くの山路を照らしてきた。

十日かかって開いた花は、わずか一夜の風で散ってしまう。

(補足)

これは中国唐代の詩人温庭筠（おんていいん）の「春日將欲東歸寄新及第苗紳先輩」と題する詩の一部です。詩は長らく付き合ってきた友人が亡くなり死を悼む内容となっています。なお原詩では「路」は「道」となっています。

(参考) 「春日將欲東歸寄新及第苗紳先輩」を掲げます。

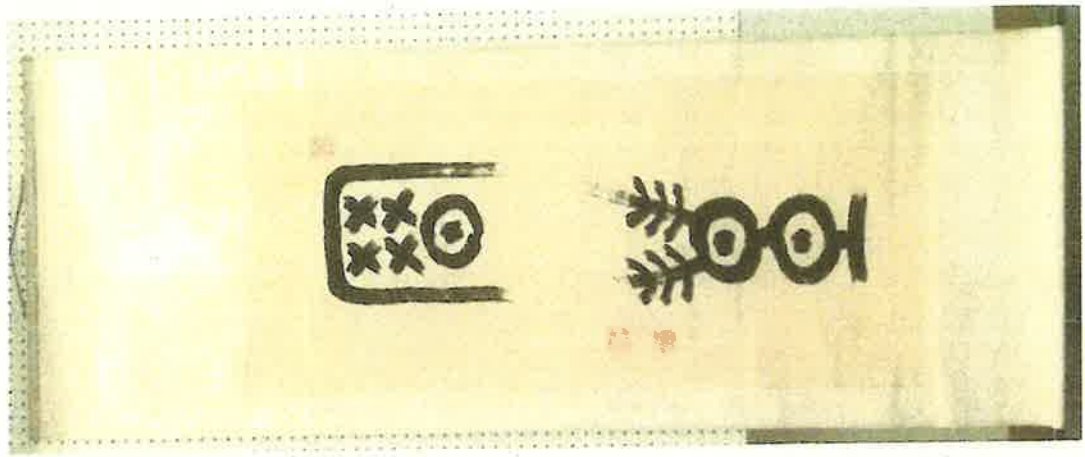
幾年辛苦與君同、得喪悲歡盡是空。

猶喜故人先折桂、自憐羈客尚飄蓬。

三春月照千山道、十日花開一夜風。

知有杏園無路入、馬前惆悵滿枝紅。

(全唐詩、卷五七八)



曆草 (れきそう)

(補足)

「曆草 (れきそう)」というのは、蓂莢 (メイキョウ) という伝説上の草の別名です。中国古代の聖王・堯 (ぎょう) 帝の時代、月初めに一つの莢 (まき) (マメ科植物で実をおおう殻) を生じ、それから十五日まで毎日一つずつ莢をつけ、十五日で十五の莢をつけるが、十六日からは一つずつ莢を落とし、三十日で莢がなくなるという不思議な草が生じます。これが蓂莢で、この草が曆を表すというので、曆草と呼ばれるようになります。



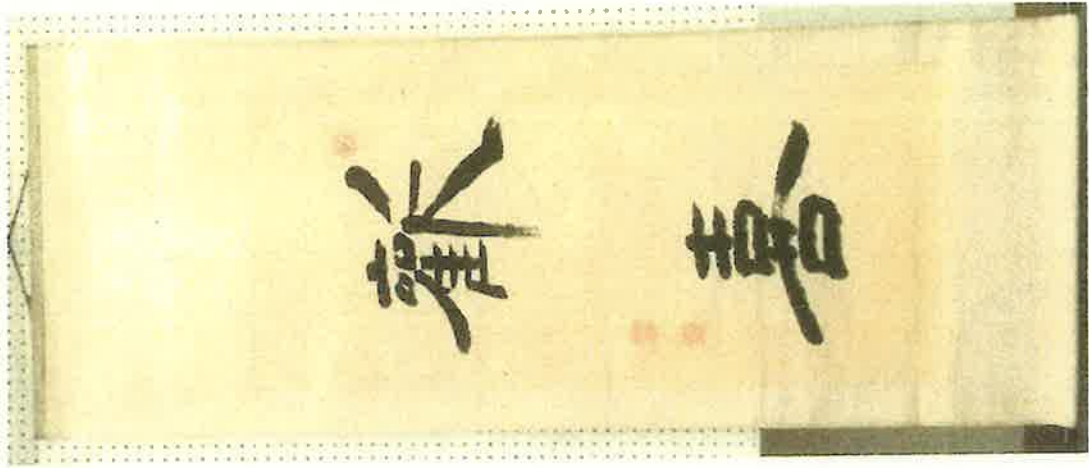
醸酒 (かみさけ)

(解)

「醸酒」は「かみさけ」と読みます。古代乙女が米を噛みそれを発酵させて酒を造ったことに由来します。「酒」の字は、秋に収穫した米や稗などの穀物を保管する酉(樽)を表す字でした。やがて酉の中で発酵した液体が洩れることから、水(さんずい)が付き、「さけ」の意になったとされます。ここに記された「酒」の字は、古代の「かみさけ」にちなみ、酒の原型である象形文字を記したものです。

酒	酉	酉	酒	酒
甲二一三二	孟鼎	三年養壺	沈兒鐘	三體石經・無逸
	圖差論	三體石經・無逸	一號漆杯	流沙簡・九
	說文・酉部	一號漆杯	一九〇	續一・九
	武威簡・有	一號漆杯	一〇	菅全碑陰
	司一六	一號漆杯	一〇	
		一號漆杯	一〇	
		一號漆杯	一〇	
		一號漆杯	一〇	

漢語大字典・酒項目



歡 喜 (かんき)

(解)

「歡喜 (かんき)」は文字通り「ひじょうに喜ぶこと」を表しますが、また民間での信仰が厚い「歡喜天」の意をも含めての揮毫ではないかと思われます。歡喜天は災害を除き、夫婦和合の神として特に商家で厚く信仰されてきました。おそらくこうした家からの求めにより揮毫したものと思われます。



禮 讓 (れいじょう)

七十六書・東山篆

(解)

「礼讓」(れいじょう)は礼儀をつくして相手に譲ることを表します。『論語』に「能く礼讓を以て国を為むれば何ぞ有らん。礼讓を以て国を為むる能はずんば、礼を如何ん(礼儀と譲る気持ちを持つて国を治めたならば、どんな困難なことがありましようか、ありません。礼儀と譲る気持ちを持つて国を治めることが出来ないならば、形だけ礼儀を行つても何の意味もないのです)」(里仁編)と見えます。一般に「礼讓」は「礼儀をつくしてへりくだる」などとされますが、本来は、相手の意見を能く聞き、己の主張のみせずに関手を立てる気持ちをもつて譲るべきところは譲ることをいうのではないかと思われます。社会を円滑にするには礼讓こそが大切ではないか、との思いから揮毫されたものと思われます。

七十六書 東山篆 七十六歳の時に書かれたもので、「篆」は篆書体という中国古代(秦)の文字をいい、印鑑などで現在でも用いられています。



紫

雲

弘化五戊申

陽春建寅

□辰 詞華

杉野東山

紫雲

弘化五戊申

陽春建寅

□辰 詞華

杉野東山

(解)

「紫雲」(しうん)は瑞雲(めでたいくも)のこと。仏教の世界では来迎図などに、往生する折、仏様がこの雲に乗って迎えに来る姿が描かれたりします。

・弘化五年(一八四八)戊申つらのえさるの辰とき建寅けんいん 詞華 杉野東山

戊申にあたる弘化五年(一八四八)の陽春(温かい)建寅けんいん

(一月を表す)の時、詞を記す 杉野東山



其淵深者
 其魚羹其
 主賢者其
 臣惠

乙未冬日

杉野忠翁書

(解)

其淵深者 其魚羹 其の淵深ければ 其の魚羹し
 其主賢者 其臣惠 其の主賢なれば 其の臣恵なり
 乙未冬日 杉野忠翁 書

その淵が深ければ、そこに棲む魚は美味である。

主人が賢れているならば、配下の家臣も優れた力を発揮する。

乙未にあたる天保六年（一八三五）の冬 杉野忠翁 書

※中国古典からの引用と思われませんが、出典は不明。

杉野東山翁についての参考資料

杉野東山は明和6年(1769)生まれ、嘉永4年(1851)83歳で、揮毫依頼を喜んで受け、筆を持ったまま亡くなったと言われている。

そのような杉野東山は天保14年(1843)に女貞園が上梓した『下総諸家小伝』に「布川の杉野利恭。字は原父、東山と號す。又耕硯堂の號あり。書をよくす、八躰を得たり。」と記載されており、近隣でも著名な書家であった。**(資料1)**

利根町内には杉野東山が揮毫した篆額6点(内文化財指定2点)、石碑3点が現存する。

(資料2)

さらに印西市には、杉野東山が揮毫した①草深922の丸山観音堂「草深野鹿(文政6年・1823年)」の碑、②結縁寺516「頼政公墳墓(文政9年・1826年)」の碑、③大森1943大森鳥見神社の「手水石(嘉永2年・1849年)」④松崎396「多聞院毘沙門堂篆額(弘化2年・1845年)」と4点が現存する。**資料3**

東山の門人たちが東山の没後に建てた「筆小塚」(羽中応順寺)には次のように記載されている。**詳細は資料4**

碑の読下し文(翻刻は別紙)

東山居士は、生まれつき素直で飾り気のない人柄で、身なりなどにはこだわらなかった。

ときには冗談を交えた話で人を笑わせることもあり、周囲を和ませる人物であった。

人の言葉を聞けばすぐに信じて疑わず、周囲の人もその誠実さゆえに彼を欺くことができなかった。

特別な趣味はなく、ただ書道だけを好んだ。昼は働いて生業を営み、夜になると書の練習に励んだ。

毎晩、楷書1000字・行書1500字・草書3000字を書くことを日課とし、一年中怠ることがなかった。

50歳になると家業をやめ、書に専念した。手本としたのは唐の書家・顔真卿であり、朝夕努力を重ねて独自の境地を得た。その名声は広まり、弟子は前後あわせて800人以上にのぼった。

本人はそれを楽しみとし、時には気ままに各地を旅した。人と会えば書の話しかしなかったが、

それ以外の話題には黙って応じなかった。書を求める人は絶えず、頼まれれば喜んで書いた。

出来栄えを相手に尋ね、良いと言われれば渡し、悪いと言われれば何度でも書き直した。

(以下略)

以上のように、利根川流域に書道家として名が知られ利根町内のみならず近隣にその名が知られた。

最後に印西市教育委員会の『草深野の特色ある石造物 第4集』に記載されている杉野東山に関する部分を紹介する。「(草深の文学碑)は利根川沿い各地に筆跡を残している布川の書家杉野東山の書であり、この点から言っても文化的価値は高い。(以下略)」

資料 1

『下総諸家小伝』に掲載された杉野東山

『下総諸家小伝』国書データベースより (<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100046875/3?ln=ja>)



『下総諸家小傳』・天保14年(1843)に女貞園が上梓した。利根川流域の文化人列伝とも言えるもので、流山から銚子に至るまで、とくに布川・布佐河岸中心に、俳諧・国学・医師・和歌・挿花ほか多種に亘って、秀でた人物を50音順に100名取り上げている。

布川の杉野利恭字の原父東山也號は又耕
硯堂此號あり書をよくと八躰を得あり

布川の杉野利恭。字は原父、東山と號す。又耕硯堂の號あり。書をよくと、※八躰を得たり。

吹竅、熾哉夜雪降るや耳を疾くし弟の
流山の清水有孝字と子徳通稱の由兵衛東
洲也號は朱子學を修む常陸源清田の人
布川の杉野利恭字の原父東山也號は又耕
硯堂此號あり書をよくと八躰を得あり
今宮の杉野忠吉通稱の嵩雲松替也號は丹
青此技を善く兼て其説は精し東山の弟
北方の立澤武御平氏字の玉明通稱也宗兵
十一

※八躰 (漢時代の後・王莽 (おうもう) が立てた「新」の時代に整理された分類です。内容は秦のものに似ていますが、一部が入れ替わっています。)

1. 古文 (こぶん) : 壁の中から見つかったとされる、秦より前の古い文字。
2. 奇字 (きじ) : 古文の一種で、さらに特殊な形のもの。
3. 篆書 (てんしよ) : 小篆のこと。
4. 左書 (さしよ) : 当時の隷書のこと。
5. 謬篆 (びゅうてん) : 印章 (はんこ) に用いるための書体。
6. 象形 (しょうけい) : 鳥虫書などの装飾的な文字。
7. 凡将 (ぼんしょう) : 当時の教科書 (凡将篇) に使われた書体。
8. 爰書 (しゅしよ) : 秦と同じく、武器に刻むためのもの。

漢字の五体⇒「篆書 (てんしよ)」 「隷書 (れいしよ)」 「草書 (そうしよ)」 「行書 (ぎょうしよ)」
・ 「楷書 (かいしよ)」

資料2

利根町内の篆額6点と石碑4点 (たぬぼん 利根ぼんぽ行より)

(1)杉野東山篆額 (すぎのとうざんてんがく) (奉献) 金刀比羅神社



布川の書家杉野東山によるもので、金刀比羅神社に奉納されています。裏面には、「天保十五(1844)甲辰孟春、彫工塗箔、押戸村 杉山林哲、同宗哲」。琴平神社(杉野東山篆額)/天保15年(1844)正月揮毫(東山76歳) ※町文化財

(2)杉野東山篆額 (圓通閣) 泉光寺



布川の書家杉野東山によるもので、嘉永三年(1850)に泉光寺に奉納されています。題字は「圓通閣」(えんつうかく)と読みます。

泉光寺(扁額1)/揮毫時期不明
※町文化財

(3)徳満寺 (地蔵堂の扁額) /揮毫時期不明



左下に「東山杉埜篆書」

(4)応順寺 (羽立山の篆額) /天保10年(1839)6月17日揮毫(東山71歳)



時天保十年在己亥六月十七日

為 廣潤妙智獻額焉

法眼 杉堅 東山 謹篆

施主 荒木邑 田口文大夫

(5)如法院不動堂 (布川不動尊) (杉野東山の扁額) /嘉永3(1850)揮毫(東山82歳)



八十二杉野東山謹拝



天保15年(1844)正月28日
杉野東山
中宿女人講中

(1) 榎華碑 (早尾天神社) / 文政13年 (1830) 年揮毫 (東山62歳)



ついつつひ あまがみ まつり
 廿五日は天神の祭かな
 菜日菴二音□□東山拜
 □五日は□□天神乃□□□□□可那

(2) 浅間神社 (開山は杉野東山) / 文政2年 (1819) 年8月揮毫 (東山51歳)



浅間神社 (杉野東山)
 開山の碑



浅間神社 (杉野東山句碑)
 揮毫時期不明

(3) 琴平神社 (空居心経碑・碑陰) / 文政10年 (1827) 揮毫 (東山59歳)



(4) 不動堂の境内六阿弥陀第六番の石塔

「天下泰平 國土安穩」
 「文政十年歳在丁亥夏四月建焉」
 ※文政10年は (1827)
 「百萬遍講中」
 「杉堅東山謹書」



資料3 印西市にある杉野東山関連史跡

(1)丸山観音堂 (千葉県印西市草深 922・草深ふれあい市民センター 電話番号 0476-47-4700 近く) の「草深野鹿の碑」



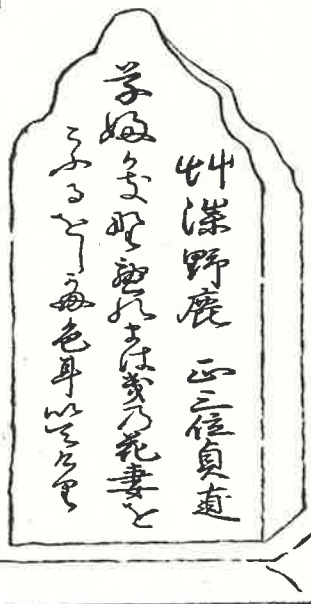
碑は文政6年(1823)、香取平左衛門利彰(朋径)により建立。正面には朋径の歌師であったといわれる富小路貞直の「草婦か支野辺野まは幾の花妻を こふるをしか母色耳いでけり」の歌が刻まれており、背面に華笑百合満(朋径)、松之舎與清、俳諧歌場眞顔の3人の歌が刻まれている。



草深野鹿の碑
杉野東山筆
高 127 cm × 幅
62 cm × 厚 21
cm

(表の句)

草深野鹿 正三位貞直
草婦か支 野辺の まは幾の花妻を
こふるをしか母 色耳いで介里
(草深かし 野辺の 真萩の花妻を
恋ふる雄鹿も 色にいでけり)



表面の文字の一部



裏面の文字の一部

翻刻・万葉仮名

『印西の歴史』第三号 平成十三年三月
草深野鹿の碑―「評」のことども―より

翻刻（万葉仮名・原文のまま）

平之可鳴聲二寤禮伐牟須備都流草深野邊乃夢廻暁

松之舎 瓊清

咲芽子乃色爾出弓叙妻戀流艸深埜邊廻竿牡鹿能聲

華笑 百合丸

旭奴等氏野邊從山丹入思香毛黄葉觀久猶宿可努覽

俳諧歌場眞顔

下總國印旛郡印西庄艸深里

請方名主香取平左衛六世孫

富小路如泥齋藤原貞直卿御門人前艸深里長香取軍曹

中臣經明之事
亦名

文政六年歲次癸未秋七月十一丁丑日 糺園華笑

了翁建百

香取氏々崇賢經定賢信賢奏賢朋經

松替郷 東山杉埜利恭書

江戸石工 山本茂吉刻之



（万葉仮名の原文にかな）

おしかななくこえにさむれはむすびつるくさふかのべのゆめのあかつき
平之可鳴聲二寤禮伐牟須備都流草深野邊乃夢廻暁

松之舎 瓊清

さくはぎのいろにいでてぞつまこふるくさくさふかのべのおおすしかのうこえ
咲芽子乃色爾出弓叙妻戀流艸深埜邊廻竿牡鹿能聲

華笑 百合丸

あけぬとでのべよりやまにいりしかもみじばらくなおねかぬらむ
旭奴等氏野邊從山丹入思香毛黄葉觀久猶宿可努覽

俳諧歌場眞顔

下總國印旛郡印西庄艸深里

請方名主香取平左衛六世孫

富小路如泥齋藤原貞直卿御門人前艸深里長香取軍曹

中臣經明之事
亦名

文政六年歲次癸未秋七月十一丁丑日 糺園華笑

了翁建百

香取氏々崇賢經定賢信賢奏賢朋經

松替郷 東山杉埜利恭書

江戸石工 山本茂吉刻之

※東山杉埜利恭書の「恭書（きょうしょ）」は【〇〇が、敬意をこめて書きました】の意味

・ 撰文=文章作成者 ・ 書=書いた人 ・ 刻=彫った人

(2)結縁寺頼政公墳墓 (千葉県印西市結縁寺 516)



碑文の一部

石碑の刻字は
『結縁寺』第一集・結縁寺里山保存会編
より転記

松替郷布川 杉野東山謹書

【原文(冒頭)】
源三位頼政公墳墓
頼政姓源其先清和之后胤三河守仲政之長男也其住藤直而仕六代君齡已及八旬官位超烈祖武勇不讓等倫可謂武將之業勲矣至射術者最天下之一人也衰歎時雲中之化為矣晚歲激其憤而謀濟子王劔嗚呼命載治承四年五月會高倉宮拳義兵當此時頼政為主將為平氏所困遂不成功而伏劔率其臣下河邊藤三郎清恒負其首而至于坂東印旛郡埋葬此里神靈今猶存云頼政既卒凡六百四十年至今然神名高天下勇士之所崇豈非武將之雄乎故立之碑以記其事再其墓去山城国宇治城凡八百里余
文政九丙戌年七月前大樹山休隱沙門快慶謹誌
下之総州伊波湖西船尾郷結縁寺

書き下し文

源三位頼政公の墳墓。

頼政は姓は源、その先は清和の後胤にして、三河守仲政の長男なり。其の住は藤直にして、六代の君に仕う。齡すでに八旬に及び、官位は烈祖を超え、武勇は等倫に譲らず、武將の業勲と謂うべし。射術に至りては、天下第一の人なり。歎衰えし時、雲中の化と為る。晩歳、その憤りを激して、子王を濟わんことを謀り、命に依じて劔嗚し、治承四年五月、高倉宮と会して義兵を挙げ。

この時、頼政は主將となり、平氏に困まれ、遂に成功せずして劔に伏す。其の臣下河邊藤三郎清恒、その首を負いて坂東印旛郡に至り、この里に埋葬す。神靈今なお存すと云う。頼政既に卒してより、凡そ六百四十年、今に至るも神名は天下に高く、勇士の崇むる所なり。豈に武將の雄にあらずや。故にこれが碑を立ててその事を記し、またその墓は山城国宇治城を去ること凡そ八百里余なり。

文政九年丙戌七月、前大樹山休隱沙門快慶、謹みて誌す。

下之総州伊波湖西船尾郷結縁寺

松替郷布川 杉野東山謹書



(3) 印西市大森鳥見神社 (千葉県印西市大森1943) 手水石 (嘉永2年)



獻奉 (けんぽう)
獻 ⇨ 献



維皆嘉永二龍舎
次己酉夏六月奠
法眼杉野東山謹篆

(4) 印西市毘沙門天參詣額 (多聞院毘沙門堂・印西市松崎396)



門 沙 毘



印西町史 資料集文化遺産編四二四頁より

掌萬民之福澤普霑吉慶
通兀兀下之財源永錫盈豐
法眼杉(墅)東山謹書
弘化式屠維大口落年皐月
(裏)掘工 杉山宋哲

掛け軸 (二)

掛け軸 (三)

朱弦 一一 聲不同

玉柱 連々 影相似

天保十三年 閏望月

(解)

朱弦 一一 聲不同 朱弦 一一 声同じからず

玉柱 連々 影相似 玉柱 連々 影相似たり

天保十三年 (一八四二) 閏望月 (閏九月十五日)

弾かれる赤い弦からは一つ一つ異なる音が奏でられ、玉柱は連々として、影はみな同じ。

(補足)

これは中国唐代の詩人王諷 (おうしん) の「夜坐看搗箏 (夜座して箏を搗くを看る)」と題する詩の一部です。詩は夜灯の元で琴を聴く内容です。天保十三年は閏年で、九月の次に閏九月がありました。この閏九月の満月の夜、月を愛でながらこの漢詩を思い出し揮毫したものと思われます。

(参考)

「夜坐看搗箏」詩は以下の通りです。

調箏夜坐灯光里 箏を調べ夜坐す 灯光の里
却挂羅帷露纖指 却りて羅帷を掛けて 纖指露はる
朱弦 一一 聲不同 朱弦 一一 声同じからず

玉柱連々影相似 玉柱連々影相似たり
不知何处学新声 知らず何れの処より新声を学ぶか
曲曲弹来未睹名 曲曲弾き来るも未だ名を睹ず
应是石家金谷里 応に是れ石家金谷の里なるべし
流传未满洛阳城。流れ伝はるも未だ洛陽の城を満たさず

夜坐つて琴を奏でている、うつすらと点る灯りの元で。かすかな灯りの中、薄い絹のカーテン（羅帷）を透して、ほっそりとした指（纖指）が現れる。薄明かりの中、赤く浮き出た弦から打ち出される音は一つ一つみな、違っており、玉柱（琴の弦を支える柱）はいつまでも変わることなく影となって映し出される。どこからこの新曲を学んできたものか、次々に曲が演じられていくが、どれもまだ初めて接するものばかり、曲名も分からない。こんな新曲が生まれる里は、まさに石家金谷の里（音楽が盛んな里の意か）であるに違いないが、まだ洛陽の都には伝わっていないのだ。

（解説者記）

質問 1

詩人王諲（おうしん）とは、王維と同一人物でしょうか（唐代 699年～759年）

回答

全くの別人です。余り有名でなく、唐詩選にも同人の詩はありません。唐代の詩を網羅した「全唐詩」にあります。

質問 2

季節は秋とのことですが、所謂「中秋の名月」と言われるような季節を詠んだのでしょうか

回答

中秋の名月は旧暦の八月十五日（望月）ですが、閏望月とあり

ますので、この年の閏月である九月の次に来る閏九月十五日の月を詠んだものです。今日で言えば、十月十五日の月に相当します。

質問 2

「朱弦」とは高価な琴を意味するのでしょうか。「玉柱」とは（琴の弦を支える柱）とのことですが、高貴な身分の女性が宮殿内で高貴な身分の方が琴を弾いている場面を詠んだものなのでしょうか。

回答

朱弦は赤い弦（琴の弦）ですが、琴の弦が赤い筈はなく、炎で照らされた弦が赤く見えたのだと思います。また室内を赤く装飾したその色も炎の光で弦の上に赤く照らしたのかもしれない。

質問 3

異なる音と同じ柱の影を対比して描く漢詩の手法なのでしょうか

回答

この詩が評価されたのは、ここにあります。一般的な手法ではなく、この詩人が考えついた手法です。場所についてははつきりしませんが、音楽を聴くといった漢詩では、主に遊郭などの遊び所での描写が多いので、これもそうではないかと思えます。

質問 4

天保十三年九月に寛政暦を廃して、天保暦を用いたという歴的

事実があるようですが、天保十三年が閏年とは、天保十三年が
一八四十二年にあたり、その年に二月二十九日が含まれている
ためであろうかとは思いますが。閏9月があつたとはどのような
意味でしょうか

回答

天保暦における閏月の設定は、複雑で私もよくわかりません。
ネット等で「天保暦と閏月の関係」として検索すると説明があ
るかと思えます。

(ネットでの検索情報)

天保暦とは

日本で最後の太陰太陽暦。天保十三年（一八四二）改暦が決ま
り、弘化元年（一八四四）から明治五年（一八七二）の太陽暦
採用までの約三十年間用いられた。天保壬寅元暦（てんぼうじ
んいんげんれき）。

掛け軸（四）

月移棕影扶勿渡

風吹菊香入座清

(解)

月移棕影扶勿渡

月は棕影に移り 勿を扶けて渡る

風吹菊香入座清

風は菊香を吹き 坐に入りて清し

月は^{むか}椋の影に移り、窓辺に添って過ぎていく。

風は菊の香りを吹いて、人々のいる坐へと清い香りを満たす。

- ・ 匆（そう）窓の意で用いる。
- ・ 扶匆（ふそう）窓辺に添って移動する様をいう。

※漢詩からの引用と思われるが、出典は不明。

質問 1

椋とは樹木の事でよろしいですね。椋鳥とは違う。何故、椋木なんでしょう？

回答

椋はムクの木です。大木になります。

「椋の実」は秋の季語 秋の終わり頃に実りますので、秋の季語と思います。

東の空から登った月が中天を西に動いていく時の経過を表してるのでしょうか

回答

その通りです。視覚と触覚を調和させて時の流れのなかで、静寂の世界を表したようです。

風、菊等ありますから、季節は秋でしょうか
静かな時の流れと静寂を感じます。

回答

同感です

菊、平安時代は人の寿命を表す

人の一生を表す 人生の秋を表すのでしょうか

回答

そこまではわかりません。

木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり 古今集

読まれた時期はわかりませんか

この歌は古今集に秋の歌として載っている読人不知の歌ですの
で、平安初期から中頃と思われれますが、特定はできません。

掛け軸 (五)

三春月照千山路

十日華開一夜風

(解)

三春月照千山路 さんしゅんつきて 三春月照らす せんざん 千山路 みち

十日華開一夜風 とおかはなひら 十日華開くも いちや 一夜の風 かぜ

春の三ヶ月の間、月は多くの山路を照らしてきた。

十日かかって開いた花は、わずか一夜の風で散ってしまう。

(補足)

これは中国唐代の詩人温庭筠（おんていいん）の「春日將欲東歸寄新及第苗紳先輩」と題する詩の一部です。詩は長らく付き合ってきた友人が亡くなり死を悼む内容となっています。なお原詩では「路」は「道」となっています。

質問 1

こちらの読み下し文、解釈をお願いできませんか

回答

別紙添付

（参考） 「春日將欲東歸寄新及第苗紳先輩」を掲げます。

幾年辛苦與君同、得喪悲歡盡是空。

猶喜故人先折桂、自憐羈客尚飄蓬。

三春月照千山道、十日花開一夜風。

知有杏園無路入、馬前惆悵滿枝紅。

（全唐詩・卷五七八）

質問 2

三春、春の三か月の間とはいつ頃を意味するのでしょうか。

回答

春は初春（孟春とも）中春、晩春の三ヶ月あります。旧暦の一月が初春、二月が中春、三月が晩春です。「春の三か月の間」とは旧暦でいう一月から三月までの三ヶ月をさします。現在では二月、三月、四月か、三月、四月、五月にあたるのでしょうか。

質問 3

三、千、十、一と数字が組み込まれているのは、詩として意図してなされているのでしょうか。意味があるのでしょうか。

回答

意味があると思われれます。数字を読み込むのも一技法です。漢詩は朗読もされましたので、ここに使われた数字はリズムカルに響いたのではと思われれます。

掛け軸 (六)

魚 帆 (ぎよはん)

(補足)

一番多くの漢字を収納しているとされる『漢語大字典』(四川辞書出版社・湖北辞書出版社)の「魚」項目には、多くの魚の象形文字が掲載されていますが、これらと比べても遜色のない篆書「魚」字です。魚(フグではないかと思われれます)を眺め、その形を文字化したのでしょう。大海を自由に泳ぐ魚を借り、帆船が大海原をこの字の魚のように自由に走る、そのような思いを込めて揮毫したものとと思われれます。

質問1 魚が(フグではないか)とはどこからそのように解釈できるのでしょうか。

回答

あくまでも私の想像ですが、この字がフグのように見えました。またフグは福に通じ、縁起のよい魚とされてきましたので、船の航路に福(フグ)がありますようにとの願いが込められたのではないかと思います。

質問 2

杉野東山は、現在の茨城県利根町に住んでいたことは確かです。近くに利根川が流れ、江戸時代は、銚子から高瀬舟が上がり、魚市場が開かれていたという。赤松宗旦の手による「利根川図誌」にも記述があります。

白い帆とフグは利根川と利根川図誌が繋がるように思われます。

漢語大辞典の魚項目をどのように見ると「フグ」となるんでしょうか

回答

漢和辞典の字ではなく、東山の字から判断すると、との意味です。ご指摘のように利根川図誌との関連からも、フグではと思いました。

質問 3

掛かれた年代は分かりませんか

回答

以下に考察されておられますが、私はわかりませんが、何かご

指摘のものに関連があるかもしれません。

【小林一茶】

- ・五十にて河豚の味を知る夜かな
- ・河豚食わぬ奴には見せな富士の山

1763年（宝暦13年）生まれ、1812年（文化9年）で50歳となる。

文化九年の正月は古田月船亭で過ごしたとの記録があるから、このときに布川でフグを食したのではないか。

杉野東山は44歳

掛け軸（七）

曆 草 （れきそう）

（補足）

「曆草（れきそう）」というのは、蓂莢（メイキョウ）という伝説上の草の別名です。中国古代の聖王・堯（ぎょう）帝の時代、月初めに一つの莢（マメ科植物で実をおおう殻）を生じ、それから十五日まで毎日一つずつ莢をつけ、十五日で十五の莢をつけるが、十六日からは一つずつ莢を落とし、三十日で莢がなくなるという不思議な草が生じます。これが蓂莢で、この草が曆を表すというので、曆草と呼ばれるようになります。

掛け軸（八）

醸 酒 （かみさけ）

(解)

「醸酒」は「かみさけ」と読みます。古代乙女が米を嚼みそれを発酵させて酒を造ったことに由来します。「酒」の字は、秋に収穫した米や稗などの穀物を保管する酉（樽）を表す字でした。やがて酉の中で発酵した液体が洩れることから、水（さんずい）がつき、「さけ」の意になったとされます。ここに記された「酒」の字は、古代の「かみさけ」にちなみ、酒の原型である象形文字を記したものです。

掛け軸 (九)

歡 喜 (かんき)

(解)

「歡喜 (かんき)」は文字通り「ひじょうに喜ぶこと」を表しますが、また民間での信仰が厚い「歡喜天」の意をも含めての揮毫ではないかと思われます。歡喜天は災害を除き、夫婦和合の神として特に商家で厚く信仰されてきました。おそらくこうした家からの求めにより揮毫したものと思われます。

質問 1

1824年（文政七年）布川村に文政七年に大火災があつたとの記述が筆小塚「東山碑」に刻まれています。

「村中嘗て火邑を闔（おお）い、七百余竈（かまど）を失う。一掃して墟と為る。居士も亦罹災し、家什擧げて烏有と為る」江戸時代に庶民の間に流行したという「歡喜天信仰」ですが、夫婦和合、除災招福、商売繁盛のご利益があるとされるとのこと

とですが、文政七年の大火との関係などがあるのではないかと考えました。この掛け軸の書かれた時期等はやはり分かりませんでしょうか。

回答

記されていませんので不明です

掛け軸 (十)

禮 讓 (れいじょう)

七十六書 東山篆

(解)

「礼讓」(れいじょう)は礼儀をつくして相手に譲ることを表します。『論語』に「能く礼讓を以て国を為むれば何ぞ有らん。礼讓を以て国を為むる能はずんば、礼を如何ん(礼儀と譲る気持ちを持つて国を治めたならば、どんな困難なことがありましようか、ありません。礼儀と譲る気持ちを持つて国を治めることが出来ないならば、形だけ礼儀を行つても何の意味もないのです)」（里仁編）と見えます。一般に「礼讓」は「礼儀をつくしてへりくだる」などとされますが、本来は、相手の意見を能く聞き、己の主張のみせず、相手を立てる気持ちをもつて譲るべきところは譲ることをいうのではないかと思われます。社会を円滑にするには礼讓こそが大切ではないか、との思いから揮毫されたものと思われます。

七十六書 東山篆^{てん} 七十六歳の時に書かれたもので、「篆」は篆書体という中国古代(秦)の文字をいい、印鑑などで現在でも用

いられています。

質問1 掛け軸の中に、自身の年齢を入れるというのは何か特別の意味があるのでしょうか。

回答

人から依頼を受けて書く場合など、依頼者の要望で入れる事が多いです。

掛け軸 (十一)

掛け軸 (十二)

紫

雲

弘化五戊申

陽春建寅

□辰 詞華

杉野東山

紫雲

弘化五戊申

陽春建寅

□辰 詞華

杉野東山

(解)

「紫雲」(しうん)は瑞雲(めでたいくも)のこと。仏教の世界では来迎図などに、往生する折、仏様がこの雲に乗って迎えに来る姿が描かれたりします。

・弘化五年(一八四八)戊申つちのえきるの辰とぎ建寅けんいん 詞華 杉野東山

戊申にあたる弘化五年(一八四八)の陽春(温かい)建寅(二月を表す)の時、詞を記す 杉野東山

質問 1

弘化五年(1848年)とは、嘉永元年です。

孝明天皇即位のための改元があり、2月28日から嘉永に改元されたことは調べました。

元号の狭間にある月なので、「建寅」という1月の異名が使用されたのでしょうか。他の掛け軸にはこのような異名は使用されていないように思われます。

回答

可能性はあると思います

改元されたという歴史的事実を表すことになるのでしょうか。

回答

江戸期改元は多々ありますので、歴史的な記録というものではないと思います。精神的な気持ちはあつたと思いますが。

掛け軸 (十三)

其淵深者

其魚羹其

主賢者其

臣恵

乙未冬日

杉野忠翁書

(解)

其淵深者 其魚羹 其の淵^そ深^{らぶか}ければ 其の魚羹^そし

其主賢者 其臣恵 其の主賢^そなれば 其の臣恵^そなり

乙未^{いっぴ}冬日 杉野忠翁 書

その淵が深ければ、そこに棲む魚は美味である。

主人が賢^{すぐ}れているならば、配下の家臣も優れた力を発揮する。

乙未^{まのとひつひ}にあたる天保六年（一八三五）の冬 杉野忠翁 書

※中国古典からの引用と思われますが、出典は不明。

質問 1

天保六年（1835年）は大飢饉に利根町も襲われていました。

天保五年には江戸の大火、天保六年には、仙台大地震と災厄が続いています。仁孝天皇、徳川家斉の時代になります。

「主人がすぐ賢れているならば、配下の家臣も優れた力を発揮する」とはそのような世情を憂いての書ではないかと考えまし

た。

出典は不明とのことですが、この漢詩には何か政治的な背景などはないのでしょうか。そもそも漢詩は政治的な意図などはないものなのでしょうか。

回答

為政者に対して、密かなる抵抗の思いというのは中国の詩人でも日本の詩人でもあります。おそらくこの揮毫もご指摘のような思いがあつたのではとおもいます。

このような質問を重ねて送るのは奥石様に失礼かとも考えましたが、不明な点あればとのお言葉に甘えさせて頂き送らせて頂きました。

お許し頂ける範囲でご教示頂ければ、幸甚に存じます。

唯根久幸

令和八年四月六日

(補足)

「春日將欲東歸寄新及第苗紳先輩」を掲げます。

春 日 東 歸 の か た に 帰 ら ん と 欲 し 新 た に 次 第 せ し 苗 紳 先 輩 に 寄
す

幾年辛苦與君同	幾 年 た る や 辛 苦 君 と 同 じ く せ し は
得喪悲歡盡是空	喪 を 得 て 悲 歡 盡 く 是 れ 空 たり
猶喜故人先折桂	猶 ほ 喜 ぶ は 故 人 先 づ 折 桂 せ し こと
自憐羈客尚飄蓬	自 ら 憐 れ む は 羈 客 と な り 尚 ほ 飄 蓬 た る こと
三春月照千山道	三 春 月 は 照 ら す 千 山 の 道
十日花開一夜風	十 日 花 開 く も 一 夜 の 風
知有杏園無路入	知 る は 杏 園 有 る も 路 に 入 る 無 し と
馬前惆悵滿枝紅	馬 前 に 惆 悵 す る も 滿 枝 紅 な り

旅先から東の方故郷に戻ろうとし科挙試験に合格した苗紳先輩
に寄せる

君と辛苦を供にして何年になるのか、だが君の死を知った今、悲しみにくれるだけで、あの苦勞してきた日々が空しく感じられる。ただ喜ばしいことといえ、古き友である君が先に科挙に合格されたこと。他方私といえ、悲しいことに、漂白の旅人として日々風に漂う蓬よもぎのような暮らしを続けていること。旅立って春も三月みづつきとなるが、その間も変わらず月は多くの山道を照らしてきた。蕾をつけ、十日を要してやっと開いた花も、たった一夜の風で散ってしまふ。進士（科挙に合格した人をいう）となつた君を祝うはずの杏園には、もう君は入ることはない。急ぎ故郷へ戻る旅先で馬を前に、私の心は沈んでいるのに、見渡す限り赤々と（桃の）花が咲き誇っている。

・折柱（せつけい）月の都にある桂の木を折るの意で、中国の登用試験である科挙に合格することをいう。

・杏園（きょうえん）アズノ園のことで、科挙試験に合格した進士をもてなす宴が開かれる場でもある。

ともに勉学に励んできた先輩でもある友人の苗紳が科挙試験に合格したが亡くなつたとの便りに接し、旅先の筆者が帰路で詠んだ漢詩。

杉野東山 掛け軸 今に至るまで

大正十二年 関東大震災の折、杉野家は、東京の下町、馬喰町、鞍掛橋近くでせり呉服問屋を営んでいました。突如、関東一円を襲った大地震は、家々をなぎ倒し全てを破壊していきました。そればかりでなく、昼近くの事でしたので、火の手が上がり瞬く間に広がっていきました。逃げなければ安全なところへ、誰しもが思いながら足は震え、身は竦みました。

店の荷車三台を引き出し、祖父、父、番頭がそれぞれの幸領で、上野の山を目指しました。山に近づいてみると、避難してきた人々で溢れ、これではかえって危険ではないかと、父は本郷台のお得意様のお屋敷を目指しました。不忍池の畔から無縁坂へ、三台の荷車は進みました。

文豪の小説に描かれた無縁坂は、その頃は狭く、逃げ惑う人々で溢れ、荷車を乗り入れる余地などはどこにもなかったのです。「おおおい、荷物はこの荷車に乗せてくれえ、構わん、この荷車の後押しをやってくれ」父が叫ぶ声が、押しつぶされそうな人混みの中から聞こえました。

誰もが安全な場所を求めて逃げなければならない、父の機転で、荷物が山と積まれた荷車は、本郷台を登り切り、六義園近くのお得意様のお屋敷に辿り着き九死に一生を得たのです。

逃げ惑う人々が次々と荷台に乗せた荷物の下には、反物を入れた丹箱が幾段にも積み重ねられ、その中には桐箱もありました。

その桐箱の中に先祖、杉野東山の掛け軸があったのです。

元号が変わり、新しい店が建ち、焼失した街並みが戻ってきました。忙しくなる商いの傍らで、父はよく字を書きました。今、思えば「毎宵臨する所、楷体一千字、行体千五百字、草体三千字を以て課と為し、終歳懈らず」と伝わる東山の血筋がそう為させたのでしょうか。

二十畳ほどあった店に、大きな布を広げ、小僧に小さな墨を乳鉢でゴロゴロと摺らせ、店先に張り出す大売り出しの看板を、布を跨ぎながら書いておりました。

静かな時は瞬く間に過ぎ、戦時色が濃くなる中、父は人から書を書くのを頼れる機会が多くなりました。それは祝出征と、応召し戦地に臨む兵士を送る幟でした。表に二階から下げるような、三、四メートルはあったでしょうか、大幟とも云われるものでした。

昭和十六年十二月 太平洋戦争がはじまり、戦線は拡大し庶民の生活は苦しくなり、店の奉公人も次々と軍隊にとられ、東京は連日の空襲に見舞われるようになりました。

祖父母が先に待つ疎開先へ、杉野東山掛け軸は日本橋の杉野家から布川の地に移されていきました。

私が祖父母の待つ布川に、疎開するその前の晩に、「いいか、お前がしっかりと守るんだぞ」父はそう言ったのです。

連日連夜に及ぶ空襲で、東京は一面焼け野原となりました。店は再び焼け、家屋敷は焼け落ち柱だけを残し、全てが灰となりました。しかし、布川の地に移された東山の掛け軸は残ったのです。

父は年賀状も手書きでした。何十枚と筆を振るったものでした。年賀状を早々と仕上げ投函し、ある年の暮れに亡くなりました。かつての呉服問屋のお得意様から、大將は亡くなったと聞いたのに年賀状が来てるじゃあないか、どうしたことかと不審がられたのが最後の筆となりました。

「嘉永四年三月三日、或いは来たりて字を索む。居士欣然として翰を染め、数十紙を揮う。忽然として僵れ、手なお筆を釈かずして終に起たず」と東山碑には書かれています。父の姿は筆を手にしたままに倒れた東山の姿を思い起こさせました。

杉野東山の血はこのように引き継がれ、そして掛け軸は、今、利根町に帰りました。

私が布川で過ごした、昭和二十年頃の利根川は、鹿島詣でに訪れた芭蕉が、布佐の宿に泊まったといわれる時代は遥かに遠く
なり、最早、鮭が遡上するなどということはありませんでした。

東山の掛け軸のひとつ、魚 帆と書かれたものがあります。この度、東山による掛け軸の解説にお力を借りた、

京都和とじさんによると、この魚はふぐを意味するのではないかとのことでした。

布川の地でふぐとは思っていた時に、ふっと思い出したのが、小林一茶の俳句でした。一茶は、五十にて河豚の味知る夜か

なと詠んでいます。

下総の国の漂泊も重ねた一茶にとって、応順寺に眠る古田月船は、東道の主であったと、柳田國男先生は言っておられます。文化九年の正月は、一茶は月船亭で過ごし、この年に五十歳となりました。

杉野東山は、古田月船、小林一茶らと深い交わりがあったと、応順寺の了善住職からも良く聞かされておりました。掛け軸の魚の字はふぐを意味するのではないかと、今になって知る話は、思いもしなかった想像をかきたて、消えることのない月日の流れを覚えます。

あの関東大震災の混乱の中を、そして止むことのない空襲の中を、守り続けた掛け軸が、文化財審議会でご審議頂くのは、子孫として望外の幸せです。

杉野東山掛け軸の文化的、歴史的価値を全ての利根町の方々にご理解頂く機会になれば、杉野分家最後の一人として、これに勝る喜びはありません。

杉野分家 唯根幸子（唯根久幸代筆作成）

令和八年五月

利根町文化財保護審議会委員長先生、他全ての先生方

利根町教育委員会 生涯学習課の皆さま